

二次元3Dち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

乳乱の姫騎士

# マーナ

火村龍

表紙イラスト/すてりい



試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『乳乱の姫騎士ミーナ』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



乳乱の姫騎士

# ミーナ

火村龍

表紙イラスト/すてりい

二次元ぷち文庫

## 登場人物紹介

Characters

---

### ミーナ

ヴァイスに故郷を滅ぼされ、地球へと逃れてきた異世界の姫。乳房に溜めたエネルギーと聖なる鎧で変身して戦う。エネルギーを溜めれば溜めるだけ、乳房は大きくなる。

### ヴァイス

ミーナの故郷を滅ぼした仇。ミーナの乳房に溜まったエネルギーを狙っている。

「ミーナ姫、そろそろ出てきたらどうだ？ いることはわかっている。出てこなくても構わないが、そのときは貴様の故郷同様、この街——いや、この世界を破壊し尽くすのみ」  
青く澄み渡っていた空は、黒い煙で覆われていた。硝煙と、肉が焼け焦げるイヤなニオイが充満している。切れた電線から火花が散り、道路には地割れが起きていた。黒い戦闘スーツを着た戦闘員たちを従えた男が腕を振ると、かろうじて形を保っていたビルの一階部分が粉々に吹き飛ぶ。溢れんばかりの魔の力は使えば使うほど強く濃くなる。

男の名は、ヴァイスと言った。

魔将ヴァイス——魔法世界にて突如頭角を現し、その膨大な魔力と頭脳を駆使し、人智及ばぬスペルを生み出し、瞬く間に国を滅ぼしていった正真正銘の化け物だ。

街にはもう、人の姿はなかった。警察が来ることも、軍隊が戦車や銃を持ってやってくることもない。圧倒的な魔法の力がもたらす暴力の前に、科学に頼って生きてきたこの世界の人間は為す術がないのだ。

「来たか」

美青年の唇がニヤリと吊り上がった。破碎したコンクリートの山の頂上に人影がある。髪を靡かせ、堂々と現れたのは、悲壮な覚悟を秘めた少女——ミーナだった。

ミーナが身に纏っているのは、ぴっちりとした全身に密着する戦闘スーツだった。一国の姫が纏うものは、光を照り返すピンク色でよく目立つ。周りに味方がいれば役に立ったであ

ろうその色合いは、守る者のいない、たった一人きりの逃亡では敵の的だった。

「ヴァイス、これ以上街を破壊するのはおやめなさいっ！ わたくしがお相手しますわ！」  
「ミーナ姫。貴様が大人しく出てくれば、我々は破壊などしない。あの国を滅ぼすのは簡単だったが、こんな辺鄙な世界に逃げてくるとは……。まったく、探すのに手間がかかったよ。それで、貴様の両親も腕一本で跪かせたこの俺に勝てるつもりか？」

「ヴァイス、あなたという人は……。！ お父様にお母様……。そして皆の敵、ここで討つてみせます!!」

「フフ。力が溜まりきった……。ということか。なるほど、前に見たときよりもずっと大きくなっているようだ。そのスーツではもう、支えきれないようだな」

ヴァイスの視線が、ミーナの美しい顔から下へ、スーツに押し込まれた胸へと注がれた。ミーナは左腕を乳房の下にいれ、支えるかのようにして立っていたのだ。その視線を受けた初心な姫君は、頬を真っ赤に染め、恥辱に震え叫ぶ。

「お、お黙りなさいっ！ そんな下劣な目で見ることは許しませんッ!!」

「ククク……。見ずにはいられないだろう、ミーナ姫。俺の目的は、貴様のその胸に詰まった上質なエネルギーなのだから……。それがあれば、また新たな研究をすることができる。力を手に入れることができる。さあ、大人しく跪いて許しを請えば、ひどいことはないぞ。痛みもなく、ただ気持ちよくエネルギーを搾って差し上げよう」

「それこそ屈辱です！ あなたのそのような性根の腐った男に、このエナジーは渡しませぬわ！」

一つの国を滅ぼすことができる力を持つ相手に、ミーナは一步も譲らなかつた。交渉は決裂し、ヴァイスの前に進み出た戦闘員たちの間から殺気と邪な感情がわき上がる。そして、それは瞬間間に臨界点に達し、破裂した。

『オオオオオオオオオツツツ!!』

間近で見る姫の美しさ、そして支えが必要なほど重く大きい胸——。性的な魅力がたっぷり詰まったムチムチの身体に、理性を吹き飛ばした戦闘員たちが飛ぶように迫る。ミーナはギュッと拳を握りしめると、戦闘用スーツを撫で、両手で自分の胸を押さえた。

「王家に伝わりし秘宝よ……。我が命に応じ、この身に——轉身っ！」

刹那、空気が震え爆発を起こし、戦闘員たちを吹き飛ばした。ヴァイスも片手を上げて目を細め、飛んでくるコンクリート片を弾き飛ばしながら、砂煙立つ爆発の中心を睨みつける。

「轉身完了！ もう、あなたたちの好きにはさせませんっ!!」

煙が暗れ、再び魔軍の前に姿を見せたミーナが宣言する。その姿に、戦闘員たちが「おお……」とたじろいだ。

ミーナの身体を包むのは、セパレートタイプの美しくも煽情的なコスチュームだった。

首元から豊満な胸を覆うスーツは薄ピンク色で、肩には羽毛を模した飾りがあしらわれている。腰から下、乙女の大事な場所はふわりとした動きやすいミニスカートと、チラリと覗くシルク地の桃色ショーツ。太ももには白いニーソックスが食い込み、同じく白の膝下ロングブーツがふくらはぎからつま先までを守っている。二の腕から手先を包むのは、ブーツと同じく純白の手袋で、柔らかな手には細身の剣が握られていた。

だが、そのコスチュームの中でも最も目立つのが、乳房の装飾であろう。

ミーナの乳房の根元は、コスチュームの上から黄金のリングで締めつけられている。それだけではなく、薄い密着コスチュームの乳首部分にも、薄い黄金の鎧がニプレスのようにつけられている。

秘宝のコスチュームはミーナ専用に変更を加えられており、大事な乳房に強力な鎧を付加し、戦闘力に劣る姫が、ヴァイスを凌駕するその魔力を巧く扱えるように調整する役目のほかにも、様々な力を持っている。

「かかってきなさい！」

剣を振り、戦闘員たちの前に降り立った姫——変身しコスチュームを纏った戦姫が高らかに宣戦布告する。熱に浮かされたように彼女を見ていた男たちは、その言葉に我に返ると、再び下卑た笑みを浮かべミーナに殺到する。

刹那——黄金のアーマーがキラリと輝き、目にも留まらぬ早さで剣が振り抜かれた。



「ぐあああああつ!!」「な、なんだ!? なぜ……!!」

寡兵でもって大国を滅ぼした力ある戦闘員たちが、木の葉かなにかのように宙を舞い、切り刻まれ地面に叩きつけられる。神聖でありながらも恐ろしいエナジーを纏い、颯風と化したミーナが次から次へと敵を打ち倒していた。

人目を引く姫の爆乳には、膨大なエナジーが込められている。胸が大きければ大きいほど、彼女の戦闘力は増すのだ。いま、ミーナの乳房は熟れに熟れた巨大メロンと化していた。「ヴァ、ヴァイス様……申し訳ありません……!!」

倒れる部下を前に、ヴァイスは舌打ちし無傷の者たちを下がらせる。そして、自ら剣を取り、ミーナの前に躍り出た。

「やはり、戦闘員では相手にならないな。それが王家に伝わると言われる秘宝か。大したものだな」

感心したような魔将の言葉に、攻撃の手を止めたミーナは剣先をヴァイスに向ける。

「その通りです。父と母がわたくしに遺してくれた秘宝のコスチューム……。これで、あなたを討ち果たしてみせますわ!!」

「フッ。そんな誘うような服を着て、男の前に立ち勝負を挑むとは……。いいだろう、そのふしだらな乳房に蓄えたエナジーの力、示してみせろ!」

「どこまでも王家を愚弄して……!! 覚悟なさいっつ!!」

言葉の応酬では拉致があかぬ。許されざる破廉恥な台詞の連続に、ミーナは怒りに震え、ヴァイスに斬りかかった。対する美丈夫も、剣を構え受け止める。甲高い音が何度も響き、美少女と魔将は数合に渡って斬り結んだ。

「くっ！ ええいつつ!!」

「ハハハッ！ 確かに力は強い……俺と拮抗するとは大したものだ!! その秘宝、見た目に反して優秀な魔具だな！ だが——」

上段から振り下ろされたミーナの剣撃を、ヴァイスは剣の腹で受けて脇へ流す。そして、流れるように身体を回転させると、下から斬り上げた。

「あああつ!!」

「所詮は姫君。力だけ強くても、技術がなければどうしようもない」

ミーナは慌てて剣を持ち上げ受けるが、攻撃を流された直後で力が入らず、剣が手から離れ宙を舞ってしまふ。瓦礫の山に消えた剣を見、慌てて召喚し直そうとするも、そのときは剣を捨てたヴァイスに懐に潜り込まれていた。

「はううっ！ う、腕、押さえられ……あぐうっ！」

ミーナの腕は頭の上に挙げたまま背後の壁に押しつけられ、瞬く間にヴァイスの魔の力によって拘束されてしまった。

「お、お放しなさ……んちゅっ!!」

じたばたと暴れ、男の急所をブーツで蹴り上げようとしたミーナは、突然ヴァイスに密着されそれも叶わないばかりか、唇を塞がれ口内を蹂躪される。目を白黒させ、なにが起きたかどうすればいいかの判断がつかない内に、男の舌は姫君のぼつてりとした唇を乱暴にこじあげ、ざらついた少女の舌に絡みついてくる。温かな唾液がミーナの口内に広がり、ようやく事態を理解し敵の舌を噛み切ってやろうとした頃にはもう、ヴァイスは身体を引いていた。

「う、うううう……こんなの、屈辱ですわ……」

唇の端から涎が一筋流れるが、腕を動かせないミーナはそれを拭き取ることもできない。「クク、では、胸のエナジーをいただけようか」

「くっ！ さ、触らないで!! これは、あなたのような男が触れていいものでは……あはああんっ!!」

むにつ、むにゅむにゅつつ!! ヴァイスの大きな手でも、ミーナの乳房は掴みきれない。乳房に指が埋まり、黄金の装飾がたわむ。乳首にはニプレスのようにアーマーがついているが、乳房は薄いコスチュームに守られているのみだ。刺激は魔力の膜である程度和らぐものの、胸を揉まれるたびにミーナは身体をよじらせ、なぜか吐息を荒くし頬を赤らめていた。

決して、ヴァイスの指使いが繊細なわけでも、こそばゆいわけでもない。どちらかとい

えば牛の乳を搾るような乱暴さで、少女の柔らかくモフモフとした胸を思いやる様子など微塵もない。にもかかわらず、少女は敵に乳房を弄ばれ、お腹を波打たせ太ももを擦りあわせ、「あんっ、ああんっ！ いや、いやです！」と艶めかしい声を上げるのだ。

「ほう。噂は真実だったか。エナジーが溜まると、胸が敏感な性感帯になってしまおうという——これは……クク、滑稽だな。よほどその胸から、母乳を搾り取って欲しいと見える」  
「だ、黙りなさ……はうんっ！ ら、乱暴にこねてはいけません……！ ああああつ、おやめなさい、やめるのです……ひいんっつ!!」

（い、いけませんわ。敵に胸を揉まれて、こんな声を出してしまっなんて……！ ああつ！  
なんてこと……。これだけは気をつけなければと言われていましたのに）

悩ましい息が、堪えようとしても漏れ出してしまふ。胸にエナジーを溜めるといふミーナの特異な体質——それは、強大な力を持つ反面、イヤなデメリットを抱えていた。エナジーを溜めれば溜めるほど、胸が大きくなり、そして感覚は鋭敏になっていくのだ。幼い頃、この力を巧く扱おうとして必死に訓練を重ねていた彼女だったが、歳を重ねるごとに感度は上がる一方、いまではエナジーがなくなっている状態でさえ、胸は弱点となつてしまつていた。

（す、すべてばれてるんだわ……。わたくしのおっぱいの弱点まで……!!）

エナジータンクでもあり、弱点でもあるこの爆乳が持つ象徴的な能力——それは、乳腺

を伝つて乳首から飛び出す母乳だった。エナジーが込められたそれは、正義のために使えば死に瀕した者をも生き返らせ、味方に飲ませ爆発的に力を高める聖女のミルクとなるが、悪しき者の手に渡れば、どうなるかわかったものではない。ヴァイスの両手が乳の根元からニップルへと搾るように移動するのに悶える声を押し殺しながら、ミーナはそれを改めて感じさせられる。

(で、ですが……!)

一つだけ、ヴァイスが知らないことがあった。それは、ミーナが身に纏っているこのコ  
 スチュームの力——。

「なんだ？ なにも出てこないぞ」

ヴァイスの表情が曇る。どれだけ揉んでも、ミーナの胸から母乳が射<sup>で</sup>乳てくる気配がない。訝しげに首を捻る魔将に、ミーナはいましかないと確信した。

「はあはあ……ござ、残念でした……! コスチュームを纏っている限り、わたくしからミルクを搾り取ることは、できません、わ……! さあ、受けてみなさい!!」

「なに……ッ!？」

ミーナの言葉、そして勝利を確信した口元の笑みに危険を感じたヴァイスは、素早く彼女から距離を取ろうとする。だが、驚いた一瞬の隙が致命的だった。

「ミルキースプラッシュ!!」

薄れていく意識の中、ヴァイスの声が聞こえる。ミーナはなにか言おうと口を開けるが、漏れるのは熱い吐息のみ。

ミーナの意識は再び闇に落ちていった――。

「こ、ここはどこです!? 前が、目が見えない……!」

意識が戻っても、ミーナの視界は目隠しをされ、真っ暗なままだった。だが、視界がなくても、自分がいまだどうなっているかは手に取るようにわかった。

いま、ミーナの身体はギロチンの処刑台にかけられた死刑囚のような格好になっている。薄い壁に両手と首を固定され、それだけに留まらず、壁にあいた穴から乳房を突き出しているようだった。自由になるのは下半身のみ、ミーナは何度かお尻を振って脚を振り上げるも、ブーツのつま先は空を切るばかりだ。

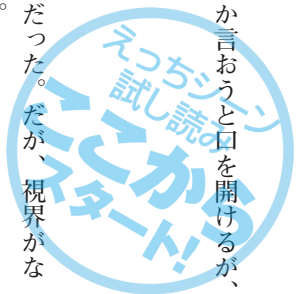
(なにもないの……?)

そう思ったとき、周囲から下卑た笑い声が聞こえてくる。戦闘員たちがいるのだ。

「目覚めたか、ミーナ姫」

聞こえてくるのは、憎き男の声だ。ミーナは目隠しされた顔をキョロキョロと動かし、せめて気持ちだけは屈してなるものかと、気丈な声を上げようとした。

「ヴァイス! あなたという人は――はふうんっつ!!」



ぐじゅっ、じゅぶにじゅっ！　しかし、その声も乳首へ刺激が加えられるとともに甘い女の声に変じ、キッと吊り上げていた眉はたちまち悩ましげに寄せられ、唇の端にはねつとりと熱く濃い涎が滲んだ。

なにか、粘ついたものが乳首を吸っている。マシンの搾乳器とは違い、それはまるで生きてくるかのようにねつとりとした、イヤな暖かみを感じさせる。時折、歯のような鋭いものを敏感ニップルに突き立てられ、ミーナは「こ、これはなんですか!？」と叫んだが、返ってきた答えは聞いたことを後悔するものだった。

「それは生体搾乳器だ。クク、気持ちいいだろう？　もう射乳そうだな」

「そ、そんな……い、生き物にしゃぶられ……イヤあつ！　き、気持ち悪い!!」

ミーナは悲鳴を上げるが、その言葉とは反対に、乳首はあつという間に臨界点を突破する。びゅるるっ、どびゅっ、びゅるるっ!!

「ひうっ、あはあああああ〜」

(で、射乳てる！　またおっぱいが、エナジーミルクが射乳てしまつて……!)

歯を食いしばり、唇を引き結び、じたばたと脚を暴れさせても、エナジーの流出を抑えることができない。乳悦とともに快楽電流が脳を痺れさせ、毅然とした表情でいなければならぬ捕虜の姫の顔を、牝の蕩け顔に墮としてしまう。次第に、腰の動きは快楽を逃そうとするものから享受するものへと変わり、脂汗が乗りテカテカした尻尾をグライندوق

せ、つま先立ちになって卑猥な踊りを始めた。

（こ、こんな動きイヤなのに……。ど、どうして!? 身体が勝手に動いてしまいますわ……。）  
乳首に吸いついた搾乳生物は、容赦なく少女のミルクを絞り出す。牙を覗かせ乳首を甘噛みし、痛みに敏感になったところで引つ張る。「ち、乳首が伸びてしまします!」という姫の悲鳴を無視し、今度はムニムニと乳肉を揉むように押し込み、小刻みにバイブレーションして搾乳よりも性的快感を与える動きをする。先の読めない快樂地獄、そして絶え間ない乳悦に、ミーナはメロメロに翻弄されてしまう。

「こ、こんなことダメですわ……。あぁっ! 身体が勝手に……。お願い、見ないで……。」  
ついに見物している敵に懇願までしてしまうヒロインのコスチュームは、すでに秘宝と誇れるものではなくなっていた。

度重なる射乳により、未だに胸に密着しているコスチュームの色は重いピンクに濡れている。頼りにしていた黄金の拘束具を破られ、残った極薄のコスチュームに防御力はなく、弄ばれるままに形を変え、少女の乳房に刺激をダイレクトに伝える。ミニスカートはめくれ、ぐっしよりと濡れたショーツが丸見えだ。フリフリと揺れ波打つヒップの割れ目にしつかりと食い込んだショーツは、光沢のあるシルク地であることも合わさって愛液と汗でぬらぬらと光り艶めかしく、くっばりと開いた膣口の形までもがはつきりと浮かんでいた。純白のニーソックスとロングブーツも、いまとなつては戦士の衣装と言うよりも卑猥な



娼婦のそれで、つま先立ちになったブーツが動くたびに、半透明に透けたニーソックスが食い込む太ももが揺れる様はもう、男を誘っているとしか思えなかつた。

「あ、ふ……んん……！ や、やあ……」

はあはあと、ミーナの耳に激しい息づかいが聞こえてくる。

（いや……。熱い吐息が……。こ、昂奮しているのですわ。わたくしの身体を見て……。ああ、は、恥ずかしい……）

目隠しをされてしまったからだろうか。ミーナの視覚以外の感覚が鋭敏になり、周囲の音、そして触覚はもちろん、嗅覚も、いつもと違った官能的な景色をミーナの脳裏に描いていた。

聞こえてくる男たちの吐息は、盛りのついた獣と同じだった。一人一人の口から、欲望に満ちた熱い息が吐き出され、それが催淫ガスのように白濁とした形をしてミーナの周囲を取り囲む。息が大きく激しくなっている。

触られていないはずなのに、ショーツからはみ出た尻肉や、太もものニーソックスが食い込む境界線などに、チクチクと気持ちいい鍼が刺さったような感覚が走る。そして同時に、蒸れたショーツの中やニーソックス、ブーツの中にたまらない搔痒感が生まれ、ミーナは「う、ん……」とヒップを振りブーツを擦りあわせた。

（こ、この二オイ……。た、たまりませんわ……。！）

独特なニオイが鼻をつく。最初は、自分の体臭と汗のニオイだったが——これが自分のニオイかと思うと、恥ずかしいと同時に、これを嗅がれているのだと胸が高鳴ってしまっただ——次第に、独特なニオイに意識が集中するようになっていった。

いままで嗅いだことのないそのニオイは、嗅ぎ始めの頃こそ、むせかえり吐き気を覚えるような代物だったが、乳首をしゃぶられ昂奮するにつれ、得も言われぬ甘美なものに思えてきた。深く吸い込むと、身体が軽くなり、悔しいとか、闘わなければという思いに霧がかかり、乳首の快感が愛おしくなってしまうのだ。ミーナは腰を振り、牡のペニスのニオイとは知らずに胸いっぱいそれを吸い込む。

(ダ、ダメ！ しっかりするのよ!!)

邪な感情が大きくなっていく——。ミーナは頭を振りそれを追い払い、あきらめるものと歯を食いしぼる。

「も、もうやめて……。で、射乳ていつてしまいますわ。わたくしの、大事なエナジーがあ……あひいいんっ！」

びゅるっ、どびゅるるっ。しかし、そんな健気な姫の抵抗も虚しく、乳房からはどんどんミルクが搾り取られていく。コリコリと乳首を噛まれた後、優しく刺激されるのがたまらなく気持ちいい。少しでも気を抜けば「んほおっつ」という、浅ましい声が漏れてしまいそう——いや、姫の立場も敵地であることも忘れ、思いきり叫んでしまいたい！ 皺

が寄った手袋をはめた手が、拘束壁をギョツと掴んだ。

当然、最も敏感になつてゐるのは触覚だ。先ほどの機械搾乳が可愛く思えるほど、生体搾乳器による乳搾りの悦楽は圧倒的だった。泥のような舌に乳首を舐められたかと思うと、ふわとろな生クリーム汁をつけられ、揉みほぐされる。そのどれもが牝を喜ばせる快美な罖だ。逃れられない悦楽の粘蔓に囚われるヒロインは、抵抗虚しく母乳を噴き出していく。そして、そんな極上の肢体を、誘うようにくねらせる美少女に、昂奮した牡が我慢などできるはずもなかった。

「はううううっ!!」

べろりとショーツを舐められ、ミーナは目隠しの下で目を見開いた。鋭敏になりすぎた肌を感じた幻覚ではない。次の瞬間には揺れる尻肉が掴まれ、上下左右に撻られる。

「お、おやめなさいっ! 誰です! ああつ、ぶ、無礼なっ」

穴から首を突き出した情けない格好でイヤイヤと顔を横に振るミーナは、せめてもの抵抗とじたばた脚を暴れさせた。だが、その脚もすぐに捕らえられ、片足を持ち上げられてつま先立ちを余儀なくされてしまう。

(ああっ! い、息が……わたくしの周囲に男の人が……。見られているんですわ……。わたくしの恥ずかしい姿を……。汗のニオイ……。アソコのニオイまで嗅がれて……!)

全身に、突き刺さるような視線を感じる。無言の吐息が不気味であり、そしてなにを考

えているのかわからなくてドキドキする。

「そんな、あああ、な、舐め取らないで……」

（イヤ、わたくしのアソコ、こんなに濡れてるなんてえ……）

だが、それ以上に恥ずかしいのは、生温かい舌で舐められている大事なところだった。シヨーツ越しに這う牡舌が、シルク地に触れぬぷりと粘っこい音を立てる。明らかに唾液の音ではない。ミーナが思っていた以上に、大事なところから愛液が漏れているのだ。

母乳だけではなく本気汁までしゃぶられてしまうという恥辱。喘ぎ悶えるミーナに、シヨーツに顔を埋めた男の吐息が荒くなる。おそらく鼻先であろう、男の顔がヒップの間に埋まり、唇を思いきり陰唇に押しつけ、シヨーツ越しにじゅるるっ！ としゃぶり尽くされる。

「ひああああああんっっ!!」

（でちゃうっ！ お汁漏れるううっ!!）

秘裂へのキスからの、突然の刺激に、ミーナは軽く絶頂し男の顔に愛液をぶちまけてしまった。ぽつてりと熱い唇の端から涎が零れる。男の顔が離れた。

「はあ、はあ、はあ……！ お、おほおうっ!! ち、乳首しごかれ……!!」

美姫の牝汁を堪能した男は離れたが、軽いオルガスムスに息をすることもままならないミーナに、休む暇は与えられない。秘部を舐められていたことで分散していた刺激が、再

び乳首に集中する。搾乳器の中で乳首が扱かれている。母乳が乳首を通り抜けるたびに、灼熱の乳悦と、エナジーが吸収される脱力感が全身を襲い、片足立ちの少女は何度も膝が落ちそうになった。

口から飛び出す声は、自分のものとは思えないほど淫らに蕩けきっており、それが情けなく、悔しくてたまらない。

そして、無言だった男たちの吐息はやがて嘲笑に変わっていく。

「感じてるな」「変態なお姫様だ」「そんな変態に、いいものがあるぜ」

（す、好き勝手なことを……！！　うううっ！　いったい、なにをなさるつもりですの!!）

ゾクゾクと、ミーナの背中に寒気が走った。周囲から衣擦れのような音が聞こえてくる。ミーナは「なにを……!!」と顔をあちこちに向けるが、視界は真っ暗で、いたずらに不安だけを煽る。

「あなたたち、わたくしにこれ以上なにかするのは許し……ひゃあぁあんっ!!」

淫らで無様な姫の口から悲鳴が漏れる。股間やお腹に、ぶよっとした肉が押しつけられた。それは熱く硬く、ぬるぬると濡れているようだった。

股間やお腹だけではない。次々に、身体のあちこちに同じようなものが押しつけられるのを感じる。手や二の腕、頬や髪、ヒップから太もも、果てはブーツに至るまで、正体不明のそれはミーナの肉を押し込み、粘液をぬり込みながらビクビクとひくついている。

「な、なんですかの!? あううつ、ぬるぬるして、熱くて……あああつ! ま、まさか、これ……!!」

男たちの吐息、嘲笑がさらに近くなった。頬に押しつけられたものから、むせかえるような濃いニオイが漂ってくる。イヤイヤと首を振ろうにも、拘束台に首を締められ、逃げることはできない。自慢の美髪が硬肉に引つ張られている。穢されているとわかる。

「こ、これ、男の人の……! イヤっ! おやめなさいつ、な、なにを押しつけているのです!? んふああああつっ」

押しつけられているのが男の肉棒だと確信したミーナは、頬を真っ赤にして叫んだ。捕らえられ、乳房を性的に責められたときから、このときが来ることは予想していたものの、いざペニスを押しつけられると、頭が真っ白になってしまう。

「ゆ、許せません……。女性に、無理矢理こんなものを……!!」

唇を噛み、怒りに震える姫戦士だったが、しかしその言葉に反し、乳首から漏れ出る母乳は勢いを増し、ショーツを濡らす愛液も一層粘ついた。

首と同じく、手首を拘束された手にもペニスは押しつけられていた。ミーナはそれを握りつぶしてやろうと思うものの、常に乳首を責められ、エナジーを吸われるだけでなく乳悦まで与えられているいまの状態では、手に力が入らず硬い亀頭を握り押しつけるくらいしかできない。

「ふ、あ……っ。ああんっ、や、め……！ やだっ、擦りつけないでっ！ やあっ、ち、乳首も、は、激しくっ」

闇に包まれた視界の中、擦りつけられるペニスはどんどん乱暴になっていく。牝の吐息がミーナの肌にかかり、愛液まみれのショーツが男槍に突かれぐちゅにちゅと音を立てていた。ショーツの中で、クリトリスの皮が剥け亀頭の尿道口にこねくり回される。小さな牝突起の引っかかりが男の心を捕らえたようだ。何度も何度も敏感な豆を虐められ、ミーナの絶頂感も次第に昂まっていつてしまふ。

「ああっ！ い、いけませんっ!! やめて、わたくしはこんなことでは……ああっ！」  
喘ぎながら紡ぎ出すミーナの声は弱々しく、端々に淫らなマゾ牝の気配があつた。

「よく言うぜ、淫乱お姫様」「感じてるんだろ？ こんなに愛液漏れてるじゃねえか」  
男たちの下品な言葉がミーナに突き刺さり屈辱を与える。カウパーがコスチュームに練り込まれ、美少女戦士のコスチュームは淫猥な娼婦のものへと変わっていく。シルク地のスーツは男根にたまらない刺激を与えるらしく、牝はミーナの柔肉を揉みほぐすようにペニスを動かしてくる。

「は、恥ずかしい……。やめるのです、ああっ！ いけません、そ、そこ……女の人の大事などころを、虐めないでえ！ ううっ、ま、負けませんわっ」

傍目にも感じていることがわかるミーナが、抵抗の言葉を、気高い姫の台詞を口にすれ

ばするほど、男たちの昂奮を盛り上げていくことに、囚われの少女は気づかない。

マゾヒスティックな虐待が、安産型のヒップから背筋へと駆け抜けた。腰がガクガクと痙攣し、「はふうっ！」と声が漏れる。全身を汚されるのが悔しく、なのになぜか感じてしまう。

（だ、だめ……イッてしまいそう……！ ううっ、わ、わたくしは淫乱じゃないの。この、おっぱいを虐める搾乳器のせいですわ……!! 敏感な乳首を虐められたら、誰だってえ……）

噛みしめていた唇がわなわなと震えながら惚けたように緩み、とろりと涎が垂れた。

快楽の大元たる乳首の搾乳器は、ミーナの昂まりを感じ取ったのか、責めの激しさを増していた。目隠しの中、乳首が文字通り、扱かれて、いるのを感じる。

だが、いまのミーナにはその意味するところを考える余裕などなかった。とにかく、こみ上げてくるエクスタシーを抑えつけなければならぬ。だが、我慢しようと意識すればするほど、たまらない悦楽が膨れ上がっていく。

「あつ、あつ……!! う、あ……も、もう……ッッ!!」

片足立ちのミーナの踵が持ち上がった。全身が強張り、媚肉が波打つ。

「ハハっ！ お姫様は限界か？」「いいぜ、俺たちもそろそろイキそうだ。ぶっかけてやるよ！」



「ぶ、ぶっかけ……いやあつ！　そ、そんなこと許しませんっ！　ひ、秘宝のコスチュームに、き、汚いものをかけるなんて……！　あひいいんっ」

（だめえっ！　と、止まらないっ！　イ、イッてしましますわ!!）

ペニスが一斉にビクビクと痙攣した。搾乳器がミーナの乳首に噛みつき引つ張り、思いきり母乳を吸い上げる。たぶたぶの乳房の中から一気にエナジーを搾り取られ、ミーナは絶頂への坂道を転がり落ちていく。

「んひいいっ！　らめっ、がまんできなひつつ!!　イ、イクッ！　イックうううう!!」

ガクッ、ガクガクガクッ!!　どびゆるうううっ!!

ミーナが喘ぎ絶頂するのと、ペニスが精を噴き出すのは同時だった。

「あひいいいいいいっ!!　き、気持ちいいのほおおおっ!!」

圧倒的な絶頂感と浮遊感。牝の悦びに撃たれ、ミーナはただ叫ぶことしかできない。頭が真っ白になり、虐められ無理矢理絶頂を味わわされるという、屈辱の悦びを刻み込まれてしまう。

秘宝の桃色コスチュームは、肉棒から吐き出された精液で白濁色に染まり、シルク地にへばりついた牡汁がぶるぶると震えていた。ショーツも同じく汚れてはいたが、股間は白濁液よりもむしろ、ミーナ自身の愛液でびしょ濡れになっている。

「ううう、うはああ……!!」

(い、いまのれ、お乳のエナジーいっばひ漏れへ……)

膣痙攣と射乳——絶頂から降りてきたミーナは、ぐったりと脱力しながらも漏れてしまったエナジーの量に愕然としていた。最早、闘うことはおろか指一本動かすのもたるいほど、身体の力が抜けてしまっている。

「クク、いい身体だ」「ああ、何発でもいいけるぜ」

男たちがミーナから離れていく。搾乳器も乳首を解放し、ズルズルとヘビが地を這うような音を立てて、どこかへ消えたようだった。残されたミーナは、全身を汚す牡汁の二オイに、胸の中で快樂の炎が燃え上がりつつあるのを感じ身体を強張らせた。

\*

すべてが終わり、ぐったりとしたミーナと、それを取り囲む戦闘員たち。

彼らを見ながら、ヴァイスはいよいよ最後のときが近づいているのを感じていた。

「いよいよだ。ようやく、すべてが手に入る」

喉の奥で殺していた笑いが漏れ出す。それはすぐに高い笑い声に変わる。

ヴァイスは勝利の高笑いとともに、ミーナのもとへ向かうのだった。

「あうう、ヴァ、ヴァイスう……!!」

拘束具と目隠しから解放されたミーナは、姿を見せたヴァイスによるよろと歩み寄った。

腕を振るが、それは自分の腕ではないかのように動かず、精液まみれのブーツはまるでヘドロの中を歩いているかのように重い。

ミーナの攻撃は、ヴァイスを殴るといふよりも、逞しい男の身体にもたれかかるといふような有様で、最後には「きゃああんっ」とか弱い悲鳴を上げ、無様に仰向けに転がった。「そ、そんな、動かせせんわ……」

床に転がったミーナの身体から、びしゃりと精液が飛び散った。

ヴァイスは冷たい笑みを浮かべ、倒れたミーナを見下ろす。赤らんだ頬、潤んだ瞳で精一杯ヴァイスを睨み、ミーナは「ううう」と呻いた。

「そろそろ、あの薬が効いてくる頃か」

睨み合いの中、先に口を開いたのはヴァイスだった。男の言葉にミーナは「な、なんのことですかの!？」と言いかけ、敗北のときに注入された液体のことを思い出す。

「あ、あれはやはり薬……! ヴァイス、わたくしの胸になにを……ッあ!？」

ミーナの動きが止まった。そして「あっ、あああっ」と喘いだかと思うと、瞳を見開きガクガクと腰を跳ねさせ、胸を押さえて悶絶した。

「あひいっ!?! おっぱい熱いっ!! ヴァイス、これはなんなのですか!?! ああっ! おっぱい、わたくしのおっぱいがあ……!」

(痒い! ち、乳首がムズムズして、ああっ! 掻き塗りたいのおっ)

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**